

北海道合鴨水稲会

水かき通信

【今号の内容】

第11回北海道合鴨水稲会圃場見学会報告(庄子太郎)	1
北海道有機農業フェア報告(清水池義治)	4
本の紹介 三島徳三著「地産地消と循環的農業」(庄子太郎)	5
訃報(当会世話人・大西孝幸さん)	6
編集後記	6

第11回北海道合鴨水稲会圃場見学会報告

庄子 太郎(事務局)

2005年7月19日に恒例の圃場見学会を行いましたのでその様子を報告します。

ホクレン神居古潭給油所横の駐車場である。農産物の直売所が設置されているが、本日は営業していない。ここが今回の圃場見学会の待ち合わせ場所である。



浅野農場で説明に聞き入る参加者。

一番乗りは中富良野の間山さんである。そこに函館ナンバーのトラックが入ってくる。ドアが開いて出てきたのは3人。瀬棚町の諸戸さんと、道中で拾ってもらった事務局員の庄子・清水池である。腹に「アイマート」と社名の入った営業車でやってきたのは岩井政海社長。筆者は名刺をいただいたのだが、そこには坊主頭の男の子の写真が。胸に「MIJ」の文字が入ったトレーナーを着ている。岩井少年6歳(年齢は推定)の姿である。

サージミヤワキ(株)からは高橋さんが参加。ちなみに高橋さんは牛乳の愛飲家で、毎日2リットルくらい飲むらしい。牛乳の消費拡大に苦心している中央酪農会議が聞いたなら涙を流して喜ぶことであろう。東川町から佐竹父子が到着。佐竹圃場も今回の見学先に入っているのだが、あちらを出てくるときにはだいぶ雨が降ってい

たそうだ。降られると厄介なので心配である。続いて栗沢町の春木さん。そこへ浅野さんが軽トラで登場。麦わら帽子はお約束である。

今年の圃場見学会への参加者は、アイウエオ順で浅野さん、岩井さん、折坂さん、佐竹さん父子、清水池、庄子、高嶋さん、高橋さん、春木さん、間山さん、諸戸さんの12人。例年よりやや少なめであった。折坂さんと高嶋さんは遅れるという連絡ももらっていたので、浅野さんの先導でさっそく出発。圃場は集合場所からすぐそこである。

浅野圃場は林と堤防で囲まれ、なんとなく山あいの水田のような雰囲気である。見渡す限り一面の、という北海道の水田のイメージとはやや異なる。天気もよく、黒いTシャツが太陽光線を吸収して暑い。カモがグワグワいつている。

折坂さんと高嶋さんが遅れて到着。折坂さんの赤いTシャツが周囲の緑と対照をなしている。高嶋さんはいつものようにバイクである。黒い皮パンツに皮ジャケット。ジャケットの背中には「Harley Davidson」の文字が。東川は雨模様と聞いて「まいったな」と。



脱走したカモの捕獲を試みる。

浅野さんの奥さんがアミを2本持ってきた。虫をとるのかと思いきや、脱走したカモを捕まえるのに使うのだという。いちいち追っかけるよりもアミですくったほうがよっぽど楽なのだ

そうだ。2本使うのがポイントである。「いまちよっと実演できないですが・・・」と言っていると、おりよく脱走者が見つかったので、カモすくいを体験させてもらう。一方のアミでカモを追い立て、進行方向に待たせておいたもう一方のアミですくいをあげる。頭からかぶせるのがコツだと言う。アミを持つ手に感じるカモの重さに快感を感じる。獲物を捕らえるという原始の快感である。浅野さんのところでは外国からのホームステイを受け入れているそうだが、そうした人たちにもカモすくいは好評らしい。「オモシローイ」とか言っているのだろうか。

カモを死なせない方法について。ヒナは、届いてからしばらく家の中で飼う。ぬれないようにペットシートを敷いておくとよいらしい。この工夫には、春木さんも感心して携帯でメモしていた。また、カモをいれる前に3~4日ほどネットに肉をつるしておき、キツネやカラスどもに電気の味を覚えさせてやると害を防げるとのこと。

ひとしきり見てから、車を連ねて東川町の佐竹圃場に移動である。神居古潭では快晴であったが、東川に向かうにつれて空模様が変わってくる。いざ現地についてみると、大粒の雨が落ちてきた。しょうがないので納屋に避難し、除草機を見学する。NH畑作研究所の製品である。納屋には「NH畑作研究所」と書かれたテレビが設置されている。PR用のビデオなのだろうが、除草機が圃場を行ったり来たりして草を根こそぎにするところが延々と映されている。草だらけの田んぼの中を除草機が進んでいき、通った跡がきれいに除草されている様子はなかなか面白い。

雨は激しさを増し、ゴロゴロと不安な音も響くが、除草機を囲んであれやこれやとしゃべる



除草機を前に熱い議論。

参加者たち。——いやあ、うちのより良さそうだなあ。うちの田んぼはぬかってどうも。除草機かけて、きれいになったと思ったらイネまでなくなってるんだ。やっぱり四輪よりも三輪のほうがいいなあ。ああなるほど、これがこうなってるのか。——やはり皆さん草には苦労しているせいか、除草機に対してはウルサイ。

雨が小止みになったところで見学会を切り上げ、お待ちかねの懇親会へ。会場は、佐竹圃場からほど近いキトウシ森林公園内の旧民家である。昔の民家が再現されており、備え付けのガスコンロや冷蔵庫・包丁などで自炊できる。8畳位の部屋が4つに、囲炉裏のある板の間が1つ。ただし囲炉裏には「使用不可」と注意書きがついている。囲炉裏の自在かぎには鉄瓶までぶら下がっているが、観賞用らしい。料金は1人1泊1050円と格安である。

ここは北海道合鴨水稲会の設立総会を行った記念すべき場所である。「懐かしいなあ」—当時を知る会員の1人が言った—「あの時は寒くてなあ」。設立総会は12月。ここの窓ガラスは一重である。通気性もすこぶる良さそうだ。「家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬は、いかなる所にも住まる。」などと言う意見もあるが、やや賛同しかねる。

当初の予定では表でバーベキューをすること

になっていたが、雨のために中止。途中のスーパーで買った食べ物を並べ、屋内で宴会である。

豆腐は適当に切って冷奴。器がないのでパックのままである。うなぎの蒲焼は食べやすい大きさにしてからアルミの皿に乗せ、直火で温める。山椒の香りが食欲をそそる。ちくわはただ切って紙皿に積み上げる。イカの塩辛にマグロの刺身、ササミフライにコロッケ。冷凍枝豆は流水でかるく解凍する。酒はドラフトワンに淡麗グリーンラベル。これらを囲炉裏端にぐるりと並べ、周りに座布団を敷いて着席。「最初っから車座か」誰かが言った。いつになく気取らない宴会になった。

懇親会からやってきた桑田さんが乾杯の音頭を取る。あとはもうてんでに飲んだり食べたりしゃべったり。例えば草の話。——いやあ、今年は草取りをやりすぎて体重が5kgも減ったよ。俺も草取りしすぎて指がきかなくなった。ほんとにヒエは憎らしいなあ。ヒエの生命力がイネにあつたらいいのに。遺伝子組み換えしてもらおうか。——草に対する恨みは深いのである。

乾杯をしたのは6時ころであつたらうか。まだ表は明るかった。太陽は落ち、夜はふけても



懐かしの場所での懇親会、大いに盛り上がる。

話は尽きることなくつづく。食べ物は一掃されて枝豆くらいしか残っていないが、酒は十分な量を買ってこた。宴は終わらない。結局、宴会は深夜1時ころまで続いたらしい。「らしい」というのは、筆者の記憶が途中から消えているからである。昨年に引き続き、今年も道半

北海道有機農業フェア開催（9月3日～4日）

—当会会員も出店して大盛況—

清水池 義治（事務局）

9月3日と4日の両日、北海道庁赤れんが前広場にて「北海道有機農業フェア2005」が開催されました。主催は北海道有機農業フェア実行委員会（委員長：小路健男さん〔北海道有機農協組合長〕）で、北海道と札幌市が後援しました。市民に有機農業の意義をアピールすることが目的で、有機農産物や加工品の販売、有機農業に関係する展示がおこなわれました。赤れんが前広場には農家や加工業者の出店がずらりと立ち並び、多くの市民が来場して盛況でした。また、屋外展示場では除草機の隣に“生きた除草機”の合鴨くんも展示されて、来場者の注目を浴びてい



「せたなオーガニック倶楽部」のみなさん。

ばにして脱落してしまった。

雨に降られるなどのトラブルはありましたが、今年の圃場見学会も無事に終えることができました。来年の担当は道央ブロックです。報告者は事務局の庄子でした。

ました。

北海道合鴨水稲会会員である瀬棚の横山さん、諸戸さん、平田さん、岡崎さん、高橋さんが「せたなオーガニック倶楽部」として、そして築城さんが「つき農園」として出店され合鴨米や野菜の販売をおこないました。当会事務局員も若干名実行委員会として企画段階から携わり、フェアの運営にあたりました。同じく有機農業を推進する者同士、この有機農業フェアの開催を通じてきずなを深めることができたと思えます。



北海道有機農業フェア会場

日本の紹介

三島徳三 著『地産地消と循環的農業』コモンズ 1800円

庄子 太郎（事務局）

北海道合鴨水稲会顧問の「さんちゃん」こと三島先生の最新刊です。「地産地消」「農産物直売所」「スローフード」「食農教育」「循環型農業」など、いま注目されている事柄を話題に、三島先生が自らの思想や信条を存分に語っています。読者からの反応も上々で、消費者団体に所属する知り合いには「わかりやすいと大評判（三島教授談）」だったそうです。

本書は2部構成になっており、第I部は「地産地消とスローフード運動」、第II部は「農民的技術による自然循環的農業」と題されています。

第I部では、日本における地産地消の源流、農産物直売所の実態、スローフード運動発祥の地であるイタリアの現地調査の報告など多彩に論じられています。なかでも三島思想が特に色濃く出たのが次に引用する部分です。流行や雰囲気だけではない、骨太な地産地消の思想があります。

地産地消の復権を本気で図ろうとするならば、近代資本主義の構造、現代では多国籍企業と超大国アメリカが実権を有するグローバル資本主義と対抗する理論と運動目標をもたなくてはならない。それらがあってはじめて、地産地消をめぐる彼我の対抗を乗り越え、地産地消の全面的開花に近づくことができる。
（第1章 地産地消とローカリズム より）

第II部では、全国各地の循環型畜産の事例が紹介されています。岩手県などで行われている、放牧を主体に乳や肉を生産しようとする試み。中国地方では耕作放棄された棚田を、牛を放牧

する草地として利用するという実践があります。あるいは、豚肉を放牧で生産しようという事例（長野県）。工夫次第で輸入飼料に依存しない畜産経営が可能であることが示されています。

そしてエピローグ。以上までをふまえ、三島先生は次のように結論します。選歴を過ぎてなお、より良き社会をめざす情熱に衰えはありません。

要するに、政府と経済界、そして国民全体がその気になれば、衣食住に必要な物資がかなり自給できるのである。ただし、その実現には、「より大量に、より速く、より便利に」というこれまでの価値観と経済システムの転換が必要である。

すなわち、地球上の自然資源を収奪し、人間労働からギリギリ搾り取るような利潤と効率性優先の経済システムを変革し、自然と人間が共生し、弱い者、小さい者が大事にされる、スローで持続的な社会、本当の豊かさを実感できる社会をつくり出していかななくてはならない。（中略）

中天に輝く星を見つめながら、「もうひとつの道」を迷うことなく進んで行こうではないか。

（エピローグ スローで持続的な社会をめざして より）

三島先生は若いです。学生の間でも評判になるほどのつやつやしたお肌や、たまに出てくる「すげえ」「やばい」などの言葉づかい。その若さの秘密はこの情熱にあったのですね。

—事務局からのお知らせ—

大西孝幸さんの訃報

8月19日、当会道央ブロック世話人の大西孝幸さんががんのため亡くなりました。享年53歳でした。大西さんはその気さくな性格と独特な存在感で、北海道合鴨水稲会の活動にご尽力くださり当会にとってなくてはならない方でした。心からのご冥福をお祈りいたします。

【編集後記】

ここ最近の報道でご存知とは思いますが、茨城県で養鶏への鳥インフルエンザの感染が相次いでおります。報道によると、中南米由来の鳥インフルエンザ・ワクチンの違法な使用が感染原因ではないかとも言われております。合鴨を用いた合鴨水稲同時作の関係者としてはあまり心地の良い出来事ではありませんが、私たちは事態を見極め冷静に対応する必要があると思います。万が一、北海道で鳥インフルエンザの発生をみた場合、北海道当局からただちに事務局に通報がされることになっていきます。その際は、可及的速やかに会員の皆様にお伝えいたします。そのようなことがありませんように。

(事務局 清水池)

おばあさんの知恵袋

ヒゲそりのコツ。まず、ぬらしたタオルを電子レンジで温めて蒸しタオルを作ります。つぎに、顔にシャボンをぬります。シャボンをぬったそのうえに蒸しタオルをのせてヒゲとヒフを温めます。それからカミソリを使うときれいにそれます。そったあとはシャボンがのこらないようによく洗い流します。元・理容師の榮子おばあさんに教わりました。

(事務局 庄子)

北海道合鴨水稲会 水かき通信 第20号
2005年 9月8日 発行

(連絡先) 北海道合鴨水稲会 事務局
〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目
北海道大学大学院農学研究科
農業経済学講座内

清水池義治・庄子太郎・井上淳生・田中重貴
TEL: 011-706-4941
FAX: 011-706-4179

E-mail: smzike@agecon.agr.hokudai.ac.jp